

村を救ったネズミは 親友

E・マカッチャン作 平賀悦子訳 田中慎子絵



訳者紹介 **平賀悦子**(ひらがえつこ)

大阪生まれ。青山学院大学英米文学
科卒業。日本児童文学者協会会員。少
年文芸作家クラブ会員。おもに英米児
童文学の翻訳・紹介につとめている。
訳書に「家出—12歳の夏」「あらしの
島のきょうだい」「子とも時代を失っ
た子ともたち」など多数ある。

現住所 = 東京都目黒区三田 2-10-9

ガーデン目黒 002

画家紹介 **田中禎子**(たなかまきこ)

東京生まれ。武蔵野美大卒。主な作
品に「ねすみのつくったあきこはん」
(秋書房)「ふしぎな青いボタン」(ひく
まの出版)「空にうかんたエレヘーター」
(あかね書房)「アルセーヌ=ルパン全集」
(偕成社)などがある。

現住所 = 東京都東久留米市学園町1-14

-34

村を救ったネズミは親友

文研しゅへにーる

訳者 平賀悦子
画家 田中禎子
発行者 佐藤武雄
印刷 岩岡印刷株式会社
発行所 **文研出版**

東京都文京区向丘2-3-10 ☎113

電話 03-814-2151

大阪市天王寺区大道4-3-25 ☎543

電話 06-779-1531

NDC933

©1987.10 E HIRAGA M TANAKA

村を救ったネズミは親友

文研出版 1987.10

208p 23cm 菊判 (文研しゅへにーる)

〈検印廃止〉

●「各」 乱」はおとりかえします。

村を救ったネズミは親友

E・マカッチャン 作

平 賀 悦 子 訳

田 中 楓 子 絵



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

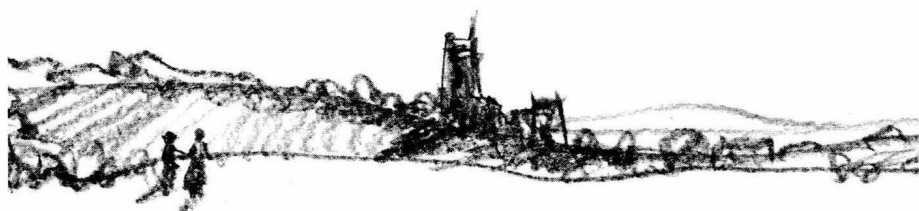
文研出版

もくじ

11	ニコラスの失敗	100
10	楽しい夕べ	92
9	人ぎらい	79
8	どこもけんかばやり	71
7	フッター家とのあらそい	57
6	エイブラハムとエイモス	49
5	バッグ一家	38
4	探検	32
3	新しい家	21
2	ドロシーおばさん	15
1	ヨークからサクスフォードへ	6



22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	
あとがき	あばかれた伝説	犯人 はんじん はだれだ！	ビクターをはなす	夕 ゆふ だち	重荷	きみのような出会い	救出作戦の成功	避難 ひなん 計画	流血事件 けつ	親友	ビクター
206	199	192	183	174	163	151	143	134	125	116	108



"THE RAT WAR"

Text copyright © 1985 by Elsie McCutcheon

All rights reserved

Japanese translation rights arranged with
J.M.DENT & SONS LTD through
Japan UNI Agency Inc., Tokyo

村を救ったネズミは親友



1 ヨークからサクスフォードへ

「戦争は終わっていない！」

駅の待合室のポスターにこんな文句がなまなましい血のような赤で大きく書かれていた。

ニコラスの背中を冷たいものが走った。耳のなかでポスターの文句が鳴りひびく。

——戦争は終わっていないかったんだ！ ほんとうかな？ 目のまえにあんなポスターがはつてあるんだから、うそのはずはない。なんてことだ！ 終戦を祝う大かがり火、花火、お祭りさわぎ。あれはどれもまちがいだったことになる。

駅名はどこにもみあたらず、汽車はロンドンとイギリス東部のサフォーク州のあいだのどこかにとまっている——そのくらいのおおよそのことしか、ニコラスにはわからなかった。とにかく、もうメアリーオの住むイギリス北部のヨークからかなり離れているのはたしかだ、とニコラスは思った。となれば、メアリーオもつきそいのブリジットも戦争がまだ続いているのを知らないはずだ。ベッドにねたきりのかわいそうなメアリーオ。ブリジットはだれもが知っているニュースすら聞きのがすことが多い。ニコラスと姉さんのモルナがいなくなつたいま、メアリーオはそんなブリジットに頼るしかない。

——ぼくとモルナでメアリーオたちにこのニュースを知らせられないかな？ ここで汽車をおりて、

ヨークへもどるべきじゃないか？

身をのりだしたニコラスはモルナのコートの手を掴み、激しくふった。

「また、なんなの？」モルナがふきげんに聞いた。ロンドンからサクスフォードへいく汽車にのりかえたりバブル・ストリート駅で、子どもあつかいされたのを、モルナはまだ怒っているのだ。ニコラスとモルナをよろしくお願いします、とブリジットがむかひの席の婦人に頼んだからだった。

「ほらっ！」ニコラスは大発見のようにポスターを指さした。「戦争は終わっていないって、書いてあるよ。どうする？　メアリーオたちに知らせなきゃ。」

駅員の鳴らす発車の笛が聞こえた。おどろいたモルナは窓に顔を付け、ニコラスが指さしたほうをみた。やにわにモルナが笑いだした。ゆつくりと動きだした蒸気機関車の騒音も顔負けするほどに、モルナのばかにしたようなかん高い笑い声があたりにはびきわたった。

「いやだあ、ニツク！」モルナが叫んだ。「ばかね！　したの大きな字が読めないの？」めがねをかけていないので、ニコラスにはしたの字がみえないのだと気づき、モルナは読んで聞かせた。「新しい敵はネズミ！　ネズミ退治にご協力を！」

「えっ！　なあーんだ。」ニコラスは座席の背にもたれた。ほっとしたうれしさに夢見ごちのニコラスには、自分がおかしなことをしかしたのも気にならなかった。

ブリジットから二人の子どもたちを頼まれた婦人があみもの手を休めていった。

「あら、まあ！」

客席は、いくつもの個室に区ぎられている。モルナとニコラスがのりこんでいた個室には、ほかにこの婦人がいるだけだった。婦人はつい声をあげてしまったのをきっかけに、二人の子どもたちの身のうえ話を聞く気になったようだった。婦人はやさしく声をかけた。

「二人でおばさんのところへいくんですってね。」（ブリジットから聞いて知っていたのだ）それからなにげなくたずねた。「どうしてなの？」

話ずきなモルナはリボンを結んだ三つあみのおさげをうしろにふりはらい、もったいぶってすわりなおして口をひらいた。「じつはね、わたしたちは一九三九年にインドからイギリスへ帰ってきて、ヨークにいるおばあさんとくらしてたんです。お父さんがインド駐在のイギリス陸軍少佐なもので。」

「インドから！」婦人はおどろいた。

「インドからの船では、わたしたちがいちばん小さい乗客だったんです。」モルナが続けた。「わたしは四歳でニツクはたったの二歳。ちゃんと乳母とか、世話をしてくれる人たちが……」

「でも！ 遠いインドから！」婦人は感心しきつたように同じことばをくり返した。

「それからずっと、メアリーオとくらしてました。ニツクは二つだったから、おばあさんのことをメアリーオって呼んでたんです。『メアリーおばあさん』といってるつもりだったんだけど。おばあさんにいわせるとね、メアリーオってすてきな名まえみたいに聞こえるから、そう呼ばれるほうがうれいんですって。駅で会った年とった女の人、ブリジットっていうんですけど、メアリーオのつきそいなんです。けさは、わたしたちをロンドンまで送ってきたってわけ。メアリーオのとなりに住んでる

ローリンソン・フォックスさんがね、ブリジットが留守のあいだ、メアリーオについてあげていてくださったんで。メアリーオは発作をおこしたんです、二週間前に。」

「あら、お気の毒に。」婦人がいった。「たいへんね！」

「ほんと。とくにニックはかわいそうでした。メアリーオがね、階段のしたに意識を失って倒れていのをみつけたのは、ニックだったんですもの。だから、九月にお父さんとお母さんが帰ってくるまで、わたしたちはサフォークにいるドロシーおばさんとくらさなきゃならなくなつて。」

「けど、メアリーオはだんだんよくなつてるよ。」おばさんはなならないという話にでもなるかと不安にかられ、ニコラスがあわてて口をはさんだ。

「そうね。」モルナがいった。「わたしたち、おばあさんとこに残つてもよかつたのよね。けど、ブリジットがわたしたちをよそへやりたがつて。そうとうなかわり者の年寄りなんです。」

「ブリジットはぼくだけならよかつたんだと思うな。そういつたもん。」

「そう。」モルナはくやしそうに口をとがらせた。「ブリジットはいうことを聞く子がすきななのよ。」

「下着のことがあつたから、そういうだけじゃないか！」ニコラスはぴしやりとやり返した。

あみものをしている婦人を見て、ニコラスがいった。

「けさね、モルナつたらぜんぜんブリジットのいうことを聞かなかつたんだよ。長い旅行だから灰色の毛のストッキングをはいて、下着をもう一枚きいていきなさいっていわれたのにさ。」

「もう六月よ、このぼかばか陽気に！」婦人はおどろいた。

「そうですよねえ！ おかしな話でしょ？ わたし、いわれたとおりになんかしなかったけど。」モルナがいった。

「そりや、あたりまえよ。」婦人がいった。「さすが、おりこうさんね！」

モルナは座席の背にもたれ、せいせいしたとばかりに笑顔で窓の外をながめている。ニコラスは感心してモルナをみつめた。子どものくせに大人あいてにどうどうとほかの大人の批判をするなど、ニコラスにはとてもできはしない。しかしモルナは自分が正しいと思えば、一步もあとへひかない。あいてがだれであろうが、かわらないのだ。メアリーオにいわせれば、モルナはニュートン家の血筋をひいているのだそうだ。父親のニュートン少佐や、メアリーオのなくなった夫で、ニコラスたちのおじいさんにあたるニュートン大佐と同じにいましく、モルナはうまれついで指揮官なのだった。ニコラスはニュートン家の血筋をひいた子とはいにくい性格である。いまましくなろうといっしょうけんめいに努力はしている。それでも、モルナに助けられてニュートン家の強い男のようなふりをするのがやつとだった。

メアリーオの家には、防空ごうがわりに使っていた大きなテーブル（台所においてあつて、鳥かごのような形をしていた）が、二つあつた。ニコラスはそのごうへはいるのがこわくてしかたなかったのを、いまもおぼえている。モルナが動物園ごっこを考えついでくれたおかげで、ようやくニコラスは空襲警報のあいだも姉さんとこの防空ごうでねるのが楽しみになった。ライオン、ピューマ、トラ。その晩ごとにモルナがぎめた動物になつて、二人はおりのような防空ごうへはいったものだった。

家庭教師のスタン先生にしかれたときも、ニュートン家の男らしくふるまうのはなまやさしいことではない、とニコラスは思った。もしもモルナが恥をかかせたら承知しないといったげに、恐ろしい目でにらみつけていなかったら、ニコラスはほとんどスタン先生にしかれるたびにわっと泣きだしたかもしれない。

モルナはニコラスがこわい夢にうなされることも秘密にしておいてくれた。メアリーオはとても耳が遠く、ニコラスがうなされても目をさますことはなかった。階下の奥の部屋でねむっているブリジットにも、ニコラスの声は聞こえなかった。

「もう、サフォークよ。」あみものをしていた婦人が声をかけた。「あと十五分で、サクスフォードね。」
「よかった！」モルナがため息をついた。「汽車はもうあきあきしたもの。」

ニコラスは、モルナほどに目的地へつのが楽しくはなかった。ドロシーおばさんの家でくらすのがたいしてうれしくなかったからだ。なにはともあれ、ニコラスにはメアリーオの家が住みごち満点だった。並木道に面した静かな家。ニコラスにはあまいブリジット。メアリーオの友だちもニコラスをかわいがってくれる。書斎にある本はどれでも読んでいい。いろいろな遊びを考えだしてモルナと遊ぶ毎日。少しいやなことといえ、毎日スタン先生がくることぐらいだったが、それもモルナの応援でなんとかきり抜けられた。

これからは、インドからイギリスへ帰ってきてから会ったこともない人、そんな名まえしか知らない

いようなおばさんにくらすことになるのだ。モルナの話では、二人がインドからロンドンへついた日に、ドロシーおばさん（二人のお母さんの妹）はホテルでお茶をごちそうしてくれたという。けれども小さかったニコラスはまったくおぼえていなかった。ドロシーおばさんとその夫のロビンおじさんは、この六年間いちどもかかえず、ニコラスとモルナに誕生日たんじゆうのプレゼントとクリスマスのこづかいを送つてきてくれた。しかしおばさんもおじさんも戦争に関係した大事な仕事をしていたから、二人に会いにきてくれたことは、いちどもなかったのだ。

ふいにニコラスはひどく心配になつてきた。

「モルナ！」ニコラスはまた、「大事件じげん」といわんばかりの声をあげた。

「えっ？」

「どれがドロシーおばさんか、わかる？」

「どういうこと？」

「ぼくたち、おばさんの顔を知らないじゃないか！ ひょつとして、だれかがおばさんのふりをして

……誘ゆうかいするとか！」

「ばかね、ニツク、そんなこと！ ドロシーおばさんからブリジットにきた手紙に、六月十一日、火曜日、四時十分すぎにサクスフォードの駅へわたしたちを迎えにでているって書いてあつたでしょうが。えっ？ あの手紙を読んだじゃないの。」

「ぼくたちのほかに、あの手紙を読んだ人がいたかもしれない。郵便局ゆうびんの人かだれか。」



「まあ！」ソックスをあんていた婦人が顔をあげてくすくす笑った。

「弟はいつもこうなの。つまらないことを空想するんです。」モルナがいいわけした。「ほんとにこまっちゃうわ。」

「ドロシーおばさんのところへは、はじめていくの？」婦人がたずねた。

ドロシーおばさんとロビンおじさんはいこのあいだサフォーク州に小さな家を買ったばかりなのだ、とモルナが説明した。ところがロシア語の話せるロビンおじさんは、難民たちの世話をしてくれと頼まれ、ドイツへいつてしまったのだった。

「じゃあ、おばさんはいま、ひとりぐらしなのね。二人がいけば、おばさんはよろこんでくださるわよ。わたしはそう思うけど。」婦人がいった。

「そうですね。」モルナは自信たつぷりにあいづちをうった。

目的地についてほしくないと願うニコラスに同情するように、汽車は悲しげに車輪をきしませながらようやくサクスフォードの駅へはいっていった。モルナはすぐにドロシーおばさんをみつけた。おばさんは改札口にたっていた。

「ほら！」モルナはとくい満面だった。「お母さんの写真とそっくりでしょ。背がずっと高いだけ。ま

ちがいつこないわ。」
たしかにモルナのいうとおりだと思しながら、ニコラスは姉さんが網だなからおろしてくれた小さな箱をうけとった（ほかの荷物は二つの大きなトランクにつめて、さきにおばさんの家へ送ったのだ

った。

「ドロシーおばさんが子どもずきな人だいいな。」ニコラスは心細そうだった。

「だいじょうぶ、かわいがってくださいるわよ。きつとね。」あみものをしていた婦人はいきなりそういつてたちあがると、ニコラスをしつかりだきよせた。モルナは弟と同じようにされるまえにすばやく手をだし、握手した。^{あぐしゅ}「さよなら！」モルナはどうどうとしていた。「お話できてとても楽しかったわ。」

姉さんはいつも大人と対等に話ができるんだ、とニコラスはうらやましかった。モルナをみると、大人たちは感心しているのだ。かわいなおじょうさん！ なんてかしこいんでしよう！ お行儀のいいこと！ たまたま弟に気づく人がいたとしても、たいていはニコラスがとつぴょうしもないことをしたときだ。だからだれもがニコラスに同情してくれ^{どうじょう}るか、おもしろそうにみているかだった。

「ほら！ さきにいつて。」ニコラスは座席^{ざせき}に足をびったりとつけ、モルナに道をあげながらいった。それというのも、窓^{まど}をみやったニコラスの目に、二人ののっている車両にむかって大またにまっすぐ近づいてくるドロシーおばさんの姿^{すがた}がうつったからだった。

2 ドロシーおばさん

ドロシーおばさんはいいい人にみえた。赤みがかったかつ色の縮れ毛^{ちぢり}がふんわり頭をつつんでいる。